

Urban Design Lab. Magazine

2014.10.28 vol. 222



異 国 の 都 市 へ

V I S I T I N G A F O R E I G N C I T Y

杭州で超満員の講義 p.2

9/27-9/29 研究室旅行 in 杭州 p.4

The Urban Design Family as a Tree p.6

ちょっと寄り道 p.8

東京大学

工学部都市工学科／

工学系研究科都市工学専攻

都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

編集長：高梨 遼太郎

編集委員：道喜 開視 原由希子 今川 高嶺

柄澤 薫冬 柴田 純花 高橋 舜 中島健太郎 益邑 明伸



階段や地面にも多くの学生が座る西村先生の講義



杭州で超満員の講義

西村先生、中国美術学院で熱弁！

Professor Nishimura Lectures about the Machidukuri of Japan

恒例の研究室旅行の今年の行き先は研究室 OG の傅舒蘭先生がいらっしゃる中国の杭州でした。この号ではその様子をお伝えしていきます。まずは、中国美術学院で西村先生が行い、傅先生が逐次通訳した講義の質疑応答の様子をお送りしたいと思います。講義の内容は飛驒古川のまちづくりで、住民の観光化された街にしたいくないという思いを尊重し、長い時間をかけて住民本位のまちづくりを行っていったというものです。この質疑応答には中国の学生の生の感想や西村先生の熱い思いがつまっていて文化や考え方の共通するところや違いを実感できるのではないのでしょうか。（質問の和訳は今秋から研究室に加わった特別研究学生の高さんに手伝ってもらいました。）

＊

古川はリノベーションをして観光客がくるようになったという理解ですが、先生の観光促進の方法論や経験を教えてくださいませんか。

スタートした時に高山は 200 万人くらい観光客が来ていて古川が 10 万人くらいでした。今は高山は 300 万人くらいでここは 40 万人くらいです。増えてい

るけれども、変化としてはそれほど急激ではないのでいろいろなことが対応できる。地元の人にそんなに不満はない。地元の人も住んでいる人が良いようにやるのがいいと最初から思っていたので、そのように動いています。でも結果的にはすこしずつ観光客が増えていて食べ物屋なども増えているし、それは自分たちの選択肢も増えるので、住民も今ハッピーになっています。

2 つの質問があります。1 つ目は建築に関してです。設計・施工は自分でやっているか、業者に頼んでいるのですか。全部一緒におこなっているのか、またはルールがあるのですか。2 つ目は大工は招いたりなどはしているのかということです。そういう人材を育てるためにどういうことをやっていますか。

1 番目のルールですけど、こちら辺の建物は見ても分かるように、間口が狭くて奥行きが大きいわけです。雪がふるので間を開けて建てるそこに雪がつもってしまうので、ピッタリ建物をくっつけて建てるという意味では当然ながらルールがあります。ただ何もやらないとこのように下がって建ってしまうので、駐車場を作るためにね。そうじゃなくて、こ

こはそろえて建てて、駐車場は別のところに作ってほしいというのをお願いしていて、これは守ってくれるところもあれば、なかなか守ってくれないところもある。

2 番目の大工さんですけども、大工さんに関してはここは大工の技術が高いということで日本の中でも有名なところですけども、それでも最近まで大工になりたいという人が非常に少なくて自信を失っているという状況がありました。だから我々の調査も大工さんが自信を持ってくれることをたくさんやったわけですね。それは雲（軒先の木口に独特の装飾を施し白く塗った、その家を建てた大工のサインのようなもの。）を調べたり、ミュージアムを提案したり。これは大工さんの技術を褒めるというためのものです。最近はずっと、そういうことがあってもいいけど、状況が変わってきていて大工さんを希望する人が段々増えてきている。この 10 年くらい日本の若い人たちの感覚が変わってきていて大工さんのような手仕事をやったり、農業をやりたいという人の数は増えてきているんですよ。ですからそういう意味では、非常に大きく今若い人たちの感覚が変わりつつある時代だと思います。

” 私がそもそもこういうことを学生時代やり始めたときには、まさに今の中国みたいな状況だったから、誰もこういうことをやろうという人はいなかった。”

杭州では南宋御街、河坊街などの街が歴史的町並みで有名です。しかし、現在観光客が来すぎて元々の雰囲気なくなってしまうように思います。観光客が増えすぎないために先生がやっていることなどはありますか。

特に問題があったのは、この状態ですね。（にぎわっている店先の写真を映す）これはあるテレビ番組が半年間この建物が主人公であったのですごくお客さんが来たという非常に大きな問題がありました。ここの店はろうそくを手作りで作っている伝統的なお店なんですけれども、普通考えたらこのようなことが起こったら、店を増しお客さんにたくさん送ろうと思うんだけど、この店はこれじゃあ仕事にならないということで表にその人が出なくなって、お客さんがそんなに来なくなるまで仕事を休んだんです。（会場から笑い声、そしてざわつき）考え方は長く安定してずっと続ける方が良いと、あるときに大きくして投資をして、上手くいかなかったらその先にリスクがある。そういう風に考えている人たちが多いんですね。おそらくそれは日本人と中国人が結構違うところで、日本人は大きくしたいという人もいますけど、安定して長くやる、そして次の世代に安定した仕事を残すことが大事だと思っている人がそれなりにいるんですよ。

Wikipedia っ て あ り ま す よ ね。Wikipedia で “Oldest Company” というのを聞くと世界の古い会社のランクが出ているんですね。その中のベストテンのうちの 7 社が日本の会社なんですね。

だからここも一軒観光客向けの店ができたけれども他はできてないんですね。なのであまりそういうことに飛びつくのは良くないという感じの人が結構多いですね。それは、ちょっと感覚が違いかもしない。つまりそういうことをやると、はしたないと周りから思われるのが嫌だという人がいる。（会場から笑



い）

1920 年代に東京で大震災があったと思います。道が狭い日本で、消防車が入れないなどはまちづくりの時にはどのようなことをやっていますか？火に弱くないのですか。

はい、その問題は大きな問題としてあります。ただ、それは全部の建物をコンクリートで固めてしまうというのではなくて、大きな道を何本か作って、そこまで消防車は来て、そこからホースをつないで消火にあたると。それに消火栓もたくさん置くということで、もう少し面として考える。一個一個の建物を完全に燃えないものとするのではなくて、面として消火活動を素早くするという考え方で

す。それでもやはりこれ以上密度があがると防火建築を作らないといけないというルールがあるんですけども、ここの街の場合はここは容積率は 300% であったのね。容積率が 300% だと日本のルールでやはり防火地区ということで防火建築を作らないといけないというルールがあるものですから、彼らは容積率を 200% に下げて木造でも良いというルールで自分たちの持っている容積率の権利を下げました。確におっしゃるように、これ以上密度が高いとこのような問題は常にある。

先生は日本でこの 30 年間の話をしていますが、日本の経済はそんなに動いていないように思います。そのような中では旅行者が増えることがそれほど望まれていないのではないかと思います。それに対して中国は現在は経済が成長しています。お金が稼げない開発は考えにくいです。

また中国においては基本的に保全活動は政府主導で行われていて、住民は歴史の価値に気づいてなく、住民自発の運動はありません。

そのような経済成長中、政府からのトップダウンでの成功はありえますか。どこか成功しているケースはありますか。成功しないと思われる場合、なぜ成功しないと考えますか。

あの、言うておきますけど、我々の入ったときには 1984 年なので日本の経済は上向きでした。日本のバブル崩壊は 1991 年なので、まだまだこういうところに経済の圧力があって、ずっと安定していたわけではないんですね。それに先ほどの質問にもあったように、やっぱり木造は火災に危ないのではないかということで変化のプレッシャーというのはすごく強いわけです。それはずっと昔からそうです。ですから大変難しかった。

私がそもそもこういうことを学生時代やり始めたときには、まさに今の中国みたいな状況だったから、誰もこういうことをやろうという人はいなかったし、すごく少数派でした。だから私が学生の時に日本がそんなにスローダウンすると思ってなかったし、誰も思っていなかったの、そういう時代だったんですね。中国も同じだと思う。皆さん今すごい伸びていると思うかもしれないけど、どこかでいろんな変化が起こるんです。必ずどこかで経済がスローダウンして、それは良いことなんです。それは皆の生活が豊かになることが実感できる世界になるので、いいことなんですね。そういう時代は必ず来るし、それはなかなかその真っ最中にいると予測できないんです。我々 1990 年に来年バブルがはじけるとい時に、その時でもやっぱり土地（の価値）は絶対この先永遠に上がり続けると思ってた人がほとんどだったんですから。

時代は変わるんです。私は自分の時代が必ず来ると思って信じて、それで仲間を増やして行っただから、どれだけ自分が信念を持ってやるかにかかっているんじゃないかと思います。以上です。■（盛大な拍手）



9/27-9/29 研究室旅行 in 杭州

Lab Trip on 27 Sep.-29 Sep. in Hang Zhou

9月27日から9月30日、2年ぶりの研究室旅行が行われました。今回は学生11名と4人の先生方、総勢15名で中国・杭州を訪れました。今回滞在するにあたって、当研究室OGで現在は浙江大学の助教をされている傅先生がプランのコーディネートを行ってくださいました。また浙江大の学生達は流暢な

日本語と英語で非常に分かりやすいガイドを務めてくれました。現地で様々な文化・建築・人々の生活に触れることができ、一同大満足の旅行となりました。傅先生はじめ浙江大学のみなさま、本当にありがとうございました。

9/27(Sat)

Today's schedule

都市計画展覧館—銭江新城—
知味観（高銀街店）—河坊街



▲都市計画博物館



▲夕食で出たトンポーロウ

杭州1日目は宿泊予定のホテルで浙江大の方々と合流した後、バスに乗って杭州の都市計画博物館を訪れました。館内には杭州都市部全体の模型が展示されていた他、まちの形成過程や今後の整備計画について事細かな解説が展示されていました。

9/28(Sun)

Today's schedule (A班)

小河直街歴史エリア—拱宸橋—
橋西歴史エリア—工芸美術館—
旧日本租界—杭州百貨大樓—
浙江大学紫金港キャンパス



▲小河直街歴史エリアにて

2日目午後を訪れた杭州百貨大樓の最上階からは、開発の進む杭州の様子を一望することが出来ました。またその後訪れた浙江大学では、日頃我々が取り組んでいるPJの活動報告を行う機会があり、先生方が発表された他にルンビニPJと佐原PJの学生が英語で発表を行いました。



▲佐原PJ発表の様子

9/29(Mon)

Today's schedule (A班)

西湖—北山路—宝石山—湖滨路—
浙江大学玉泉キャンパス—中国美術学院象山キャンパス

3日目午前中は世界遺産である西湖を訪れました。西湖周辺は建造物の高さ規制が面的に設けられており、高層ビルが乱立していた杭州都心部とは違った風景を目にすることができました。一方で湖の後背地には一際目を引く軍関連の施設が見え、中国の政治的な部分での複雑さを改めて実感しました。



▲世界遺産・西湖



▲中国美術学院内の建物

番外編 M1&M2、前後で上海・黄山へ

今回はM1とM2の学生が前乗りして上海を訪れました。上海では超高層建築が立ち並ぶ外灘地区や、かつて世界で3番目の規模の食肉処理場として使われていた施設をリノベーションした上海1933などを見学しました。

M1はさらに、杭州での旅行を終えたあと黄山へ。黄山では文化遺産と自然遺産の複合遺産である風景区などを見学しました。上海・黄山旅行の詳細は8ページをご覧ください。



▲上海・外灘地区



▲黄山風景区の様子

(編集:M1 高橋)

研究室旅行を終えて A Comment After the Lab Trip

— M1 からの報告 —

-Report from M1-

浙江大学の方々の丁寧なガイドもあり、得るものの多い研究室旅行となりました。今回メインで訪問した杭州について、M1の2人に感想を聞きました。

M1：中島健太郎 Kentaro Nakajima

杭州滞2日目は、京杭大運河と運河沿いに広がる保存区を訪れました。京杭大運河は、北京と杭州の中国の南北の都をつなぐ総延長1974kmの運河であり、掘削の始まった春秋時代から2500年を超える歴史を誇る、世界最大にして最古の人口運河です。2014年のカタールにて開催された世界遺産委員会にて世界文化遺産にも登録されています。柳並木や遊歩道といった運河沿いの整備は進んできている印象であり、水面との距離



▲中国国旗が映えるまちなみ

の非常に近い建築物は、運河と密接に繋がっていたであろう暮らしを想起させました。

水上物流により古来より発展した町並みが数多く残る運河沿いは、指定保存地区として歴史的な町並みの保全が進められ



▲生活の見える風景

ていました。国慶節の前ということもあり、掲揚された国旗の赤が差し色となった町並みは、非常に美しいものでした。日本ですとこういった保存地区は地域の人々の暮らしと分けられたテーマパーク的なものになりがちではありますが、ここでは洗濯物があちこちで干されるなど生活感が出出していて、日本と中国の違いを感じました。

M1：滝澤暢之 Nobuyuki Takizawa

上海発の列車から降り立った杭州駅がいかにも地方都市の駅といった風情が漂っていたのは裏腹に、実際に街を巡ってみると杭州はかなりの大都市。何よりも驚いたのは街のスケール感で、地図を眺めた時に想像した数倍の大きさがあったのには面食らいました。広大な土地に高層マンション群が次々と建設されている光景はまさに『300万人の現代都市』の実写版といった具合で、こんな都市に至る所にある中国恐るべし…とい



▲小河直街歴史エリアの一風景

うのが一番率直な感想です。しかし一方で古い街並みや工場群といった建築遺産、都市遺産の保全には思っていた以上に積極的で、また周囲に合わせた歴史的景観地区を“新たに作り出す”という手法は賛否両論は分かれそうですが日本とは大きく異

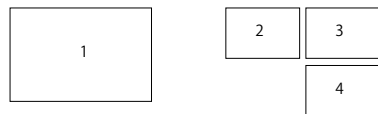


▲西湖の様子

なっており興味深い点でありました。

ちなみに噂の大気汚染は想像以上に深刻でしたが、西湖の風景は透き通った青空よりも案外あれぐらい霞んでいるほうが山水画のようでそれらしいかな、と思ってしまうあたり、ある意味全てをひっくり返して現代中国の“文化的景観”(?)と言えるのかもしれませんが。

(編集:M1 高橋)



- 1 西湖を案内する傅先生と西村先生、同済大学の張松先生。
- 2 中国美術学院で講演される西村先生と通訳をされる傅先生。学生からは質問が相次いだ。
- 3 浙江大学紫金港キャンパスにて浙江大学の方々と集合写真。
- 4 小河直街歴史エリアにて。旅行中は国という垣根を越えて互いの研究室の取組みについて活発な意見が交わされた。

The Urban Design Family as a Tree

1 本の木で表される都市デザイン研究室

Assistant Prof. Christian Dimmer

The lab trip this year was planned and executed by Prof. Fu who is a graduate of the laboratory. The Urban Design Lab. tends to visit the graduates of the lab. for the lab trips, where we can experience cities to a depth that would have been difficult without the support. Prof. Nishimura used the words “extended family” to describe this network of the laboratory in a lecture at Zhejiang Univ.

Assistant Prof. Chris, who knows well of the laboratory system and other systems well, explains the peculiarities of these “extended families” and what we should keep in mind when being a part of them.

今回の旅行は研究室の OG、傅先生の企画のスケジュールで行われ、傅先生と先生の生徒が案内してくれました。都市デザイン研究室ではその卒業生のいる国に旅行することで、個人で旅行をしても体験することができない体験をすることができます。このような研究室の OBOG かなるネットワークのことを西村先生は、研究室旅行 2 日目の浙江大学の講義において “Extended Family” という言葉を利用して説明されていました。

この表現に感銘を受け、他国の研究体制にも精通しているクリス先生から日本の研究室の持つ意味やどういう意気込みであるべきかなどについてお言葉をいただきました。

*

The laboratory system is a core component of graduate education in Japan. It is a very unique and peculiar feature that does not exist in the same form at American, European or Asian universities, where students are not affiliated with one particular teacher; one line of thought. In a laboratory practice and education are closely interlinked; students and teachers are learning together by doing real-world projects.

The laboratory system can be understood as an extended family, with all the past and future teachers and students being part of an ever emergent family tree.

In the case of the Urban Design Laboratory, who else can claim to be part of a ‘family line’ that goes back to influential figures like Kenzo Tange, Eika Takayama, Sachio Otani, Sadao Watanabe, Yukio Nishimura, or Takeru Kitazawa? How comforting it is, not to be doomed to start from scratch and instead stand on the shoulders of such giants; to develop new ideas by drawing on the wealth of previously developed experience and skills? How reassuring it is not to be left alone; always able to turn to other members of the family for advice?

As every coin has two sides so also family life is not eternal sunshine. Being born into large and notable family, it is as much a privilege as much as it is an obligation. Being in the same family line with giants the pressure can be significant.

Do I measure up to urban design pioneers like Kenzo Tange, who built up the whole discipline of urban design in Japan almost single-handedly? Will I get anywhere close to Takeru Kitazawa, who has actively shaped the emergence of Yokohama City as an urban design capital for decades? How to become like Yukio Nishimura, who is skilfully spreading urban design and preservation ideas across East Asia and inspiring a growing network of experts and activists? In short, what will be my own contribution to the family tree? Will I be ever able to measure up; to become a useful and respected member?

Over the years the family tree has grown, with ever new limbs branching off to other universities, institutions and to other parts of world. Like a tree, this living and growing urban design network is infused with the original ideas and values from the roots, but on the other hand, these branches are also feeding back the energy that they generate through photosynthesis, and thus re-energise the whole tree.

Rather than being static and immutable, this living family tree that has grown out of the work of Kenzo Tange and it had to respond to the different challenges of the day: carving out pedestrian space in the 1970s, making urban design more pluralistic in 1980s, preserving what was left of the cities’ built heritage in the 1990s and developing new tools for a

highly differentiated, matured, post-growth society after 2000.

A tree is only as strong as it is able to tap into new nutrients and broaden its roots; as long as it stays flexible to bend its branches in strong winds. By inviting in new family members from different disciplines and backgrounds, entirely new kinds of skills and knowledge are grafted to the tree; making it more diverse, more colourful, and more strong.

A tree grows even stronger if it hasn’t have to stand on its own, if it is part of a healthy, thriving and diverse eco-system. By spurring its seeds far and wide and by enriching its own DNA with those of other equally proud trees, a burgeoning, lavish forest is growing; full of different old and new trees; needle trees and and leafed trees; of high and low growth.

To leave our metaphor behind: In order to make our cities better in a time of growing counter market pressures, worsening environmental challenges, severe demographic, economic, and socio-cultural transformations, it is important to be rooted in strong values, like the family tree. We must branch out and connect to others. Only if we collaborate with many others from different disciplines, can we hope to succeed to make more liveable, loveable, sustainable, memorable cities full of diversity and energy. ■

(編集 :M2 高梨 &M1 高橋)



ちょっと寄り道

Visiting Places on the Way to and from Hang Zhou

研究室旅行の前後では多くの修士の生徒が中国の近くの都市を訪れてきました。杭州へ向かう前に立ち寄った上海と、杭州から向かった黄山について M2 チャールズと M1 森川に報告してもらいました。

(編集:M2 高梨)

M2: Charles Lau

The Stay in Shanghai

Urban Design Lab had a lab trip to Shanghai and Hangzhou. We went to see many historic and modern places in Shanghai.

The first was Tian Xi Fang. Originally an old residential area, it was slated for demolition but was preserved for arts and culture after protests from residents and activists who wanted to preserve its old world charm. Next was Xin Tian Di. Another redeveloped residential area, it was originally a traditional Chinese Shikumen houses, but is not an area which has an active nightlife and art galleries. Shanghai Another was World Financial Tower. Built by Mori Building, it is currently the highest tower in Shanghai, and offers a great view of the city from the top floor. Finally, the Yu Yang Gardens (Garden of Contentment) is a traditional Chinese garden which was originally planned in the 1560s. However, due to turbulent times such as the Opium Wars, it was destroyed and rebuilt many times.

I believe that China what makes China distinctive is that while it pursues rapid modernisation, it is also trying to keep and preserve its centuries-old cultural heritage. It would be good to study the progress of China to see if it can successful preserve its cultural heritage yet achieve rapid modernization at the same time.



▲ Tian Xi Fang

▲ Garden of Contentment

Information

10月のウェブ記事

PJメンバー、全国の都市に飛ぶ
日本一の住宅地！？ 視察案内
アート&コミュニティスペース「にこぶら新地」オープン
住民ヒアリング in 旧森田銀行
重要無形文化財 佐原 秋の大祭！
是非ご覧下さい：<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

11,12月の予定

11月1日2日	神田老舗ツアー
11月5日	第6回研究会会議
11月27日	第7回研究会会議
12月18日	研究室忘年会@鳳明館



▲ M1 中心のメンバー

M1: 森川 千裕

黄山旅行

9月30日(火)から10月2日(木)にかけて、M2のラウ、M1の今川・柄澤・高橋・滝澤・中島・益邑・森川・李の計9名で、安徽省黄山市に訪れました。黄山は、1990年に世界複合遺産に登録されており、景勝地として知られています。9月30日は、杭州から約3時間30分バスに乗り、黄山屯溪老街へ向かいました。石畳の道沿いに並んだ徽州式建築の商店は古く、時代の積層が感じられました。翌日、黄山旅行のメインイベントである黄山風景区を訪れました。主に登山になりますが、途中まではロープウェーで上ることができます。この日は、国慶節ということもあり、混雑が予想されていましたが、人も少なく、すぐに乗ることができました。ロープウェーを降りてから見た景色は、見渡す限りの雲海が広がっており、そこに周辺の岩山が重なって、まさに水墨画の世界でした。登山は想像以上に大変でしたが、空気もきれいで、久々に青空を見ることができたため、有意義な時間を過ごすことができました。



▲ 息をのむ景色

✧ 編集後記

高梨 遼太郎

僕にはすごく地味な趣味があります。それはきっと皆さんのiPhoneにもついていけど聞いたことのないであろう「ポッドキャスト」というのを聞くことです。録音されたラジオのようなもので、頭を使わない模型制作やレイアウト作業中、通学の時間とかにニュースやお悩み相談、お笑いとかも聞いてます。電車の中でクスクス笑っている僕を見た場合、話しかけるのは笑っていないタイミングであるとあまり恥をかかなくて済むのでありがたく思います。